

たことにより、疑問が一ツ一ツ解決された。ロータリアンも人間であり、あまりにもロータリーに期待を持ちすぎたことへの反省、ロータリー哲学の次元の高邁さと、反面ロータリアン一人一人が童心に還り、これらが相交错し、切磋琢磨する場がロータリー、と私なりに定義づけるにいたった。以下、各年次大会出席メモより抜萃してみたい。

第二五八地区年次大会、自から司会された清瀬ガバナール、老練で物腰ひくく、一言一言に説得力がある。ポールハリスフェロー朝食会で、ノーマクタイであった非礼を詫びたが「イヤイ結構です、ドウモご苦労さま」と握手、全身総て人格……実に感激し、五年前、バリー某クラブ会長と面談の際、「貴方の服装だけで、貴方の人格を評価しない」といわれたことを思いだし感無量であった。

第二六八地区年次大会、シンボジウム「ロータリーの道徳律と職業奉仕」、塚本、三宅、前原、山本各バスターガバナールがバネラー、実に圧巻であった。儲けてよし、それを上廻る奉仕せよ……といわれる前原先輩、やや求道者としての哲学論を前提とする……山本先輩、ロータリアンも人間……の立場から説く三宅先輩、ロータリアンはかくあるべきを前提としてさす……塚本先輩、次元の高い有益な大会だった。

第二六五地区年次大会、「世界を結ぶ人類の

望み」パネル討論会、リーダーは千バスターガバナール、実に大坦率な司会。オーストラリア副首相のご令嬢、交換学生として日本に、受け入れたクラブの親切が、両国間の貿易不均衡問題で来日された副首相に大きな感銘を与え、一挙に解決の動機たらしめた事例。カウンセラー当時の願いと、全国のロータリアンが出張先で握手まではやらないまでも、お互いに声ぐらいはかけあいたいもの、と討論会をしめくり同感と感銘を深くす。

第二七九地区年次大会、「社交クラブか奉仕クラブか」のテーマ、総括リーダー岡野バスターガバナール、結論ではないがいずれでもある……と受けとめられる討議、現実的な議論、教えられることの多い大会だった。

第二五一、二五九各地区年次大会、いずれも特色があり、第二六六、二七〇各地区年次大会では、多くの知人、友人と歓談ができ、ロータリーとはこれで良いのではなからうかと、帰路何か清々しい気分となった。

東京国際大会に五日間出席、大学ノートにギッシリメモをとる。ほんの一部後記してみたい。「ロータリーの奉仕は将来への投資である」「世界の平和はどこにある個人にある」「ロータリアンの全部が会長の一部である」「世界はみな兄妹だ」「衣、食、住より友情が先」「ロータリー財団の目的は世を救う人をつくるものに与え

各匡のロータリアンは、この大会を高く評価した。わたしは彼等から直接この耳で聞いた。

「ゴージャスだ、欠点が見当たらない」

そして、また「日本の親切は忘れなす」とも。わたしは、この大会に出席して、数多くのことを学んだ。その中の一つに、SAAの役割の大きさを再確認したことがある。SAAの奉仕活動如何が、その年度の例会場の良否を左右するといっても過言ではないと思えるし、クラブ奉仕部門の中でも、最も重要な場であり、SAA委員長がクラブ役員であることもうなづけるのである。極言すれば、SAAの活動を、クラブの奉仕原点と考えていいのではないかという気さえした。

地区大会と

国際大会より学ぶ

東京町田 阿部 恒雄

ロータリーに入会して十四ヵ月、入会直前の研修会で、一人前となるには五ヵ年間の要すと教えられた。私なりに手当り次第勉強した。探究すればする程懐疑心が募り魅力が薄らぐ。退会を決意し手続したが、受理されず、会長、幹事に説得された。しかし変ることなく抵抗を感じていたが、地区年次大会、国際大会に出席し